

須賀川に生まれ、安積高から青山学院大の文学部英文科に進んだ。卒業後に帝京大の医学部に入り直して、福島医大の外科に入局した。高校の男子校の3年間は、何事にも一本気で当たれた時代。あの日あの時、心に染めた色が、一生のカラーになっていることを感じる。3年の夏には、野球部が決勝戦まで進出。母校の良さを尽くした夏に、青雲の志の高鳴りを感じた。今も、あの夏を思い出して、自分がつくってきた風采を見直し、良きエネルギーを持って、颯爽(さっそう)と闊達(かたつ)にいかるかを自問する。

文学を学び、自分は何者たり得たいかを熟考して医師を目指した。これまで医局の関連病院への派遣・転勤を経たが、郷里の須賀川か、所縁(ゆかり)の深い郡山に落ち着きたいという希求を教授にかなえていただき、郡山の医療機関に着任した。ここ数年は、健診・ドック業務に従事し、昨年4月に総

民報 サロン

合南東北病院に着任した。予防医学研究センター勤務。これから、予防医学はますます重要な分野であり、外科医であった治療経験と、健診業務に携わってきたノウハウの融合は、私にとって最良の帰結であったと思える。深甚なる敬意と感謝を胸に、謙虚に明朗に、自分のカラーを発揮して、ますます地

人間存在への洞察



柿沼 雄二

域の皆さんの健康を守りたいと熱意を新たにします。

文学部を経た分、何を話すかだけでなく、どう話すかも重視してきた。伝えることや書くことの重要性を感じてきた。わざわざ書かなくてもいいこともある。しかし、東日本大震災で多くのものが流されて、多くのものが失

われた中に、日記や手紙が見つかって、文章や文字が残っていたことで、それが救いとなったとの報道にも接した。書くことで、人の心に残せるものがある。民報サロンで紡いできた意味も、きつと、そこに。

しなやかに強く、新型コロナウイルスに対しても、当院が果たしてきた役割の大きさと、理事長と院長の気概や情熱の大きさを思う。人生が長くなって、これからはますます頼れる先の存在も大事になる。感染症対策に救急医療。当院の果たす役割は、今後も大きいものになる。その一翼を担って、健康街づくり構想を目指したい。

医療は、人間存在に対する洞察。まず、人に関心を持ち、医師として、病めるかたに、鋭く、かつ温かな科学の目を向けなければならぬ。そして、洞察から得た見識や思念を文字化する所業が文学。「医」と「文」と、その両輪が、これからも私には大事である。きつと、人生の最後に残るものは、自分が集めたものでなく、自分が与えたもの。よってなお、また明日も、朝は希望で起き、昼は使命を生き、夜は感謝に眠ろうと心に誓う。

(郡山市、総合南東北病院医師)